

### 〈論文〉『上海』ならびに『支那』：五・三 ○事件の余燼と創造：ことごとくの声をあ げて歌えラングストン・ヒューズ

田中，益三

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1984-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019415>

# 『上海』ならびに『支那』——五・三〇事件の余燼と創造——

——ことごとくの声をあげて歌え

ラングストン・ヒューズ

田 中 益 三

アヘン戦争の結果に伴う南京条約（一八四二）により香港が割讓され、広東・厦門・福州・寧波・上海の五港が開港されるに及んで、中国は、その「眠れる獅子」の、実は無力な姿を露呈することになった。列強は、それぞれに最惠国条約を取り付けて、この新天地に群がり、八租界Vという居留地を設定して国家欲をむきだしにしていったのである。このことは、日清戦争以後、いっそう過密化し、租界設定国は八カ国に及び、各地の租界総数は二八カ所という現象をもたらした。なかでも、もっとも早い時期に租界が設定された上海（英租界——一八四五年、仏租界——一八四九年）は、帝國主義による介入という矛盾を抱えつつ、中国の先驅的な商業都市として繁栄していた。そして二十世紀に入ると、中国の民族産業の支柱である綿織物に着眼した資本家達特に日本のそれらは在華紡の進出を果していったのである。この在華紡の活況に伴う工人達から新しい労働者階級が現れて来、反帝國主義・反封建の氣運が、いよいよ

よ濃厚になって来た。その先鞭をつけたのが、五・四運動（一九一九）であり、これ以降、排外熱と民族自決の動向は過熱してゆく。これから述べようとする上海と広東の各状況は、そうした動向の具体的な現れであった。通常は「大革命期」（一九二五―二七）と呼ばれている時代の中で打ち続く暴動の数々は、この時期に着目した文学者に、イデオロギーや書法の違いを越えて個性的な形象化をもたらしている。

ここでは、五・三〇事件（一九二五）を媒介にして生じた幾つかの作品の裡、二つを選び、観点と書法の相異による各作家の創造の差異を求めることにする。歴史という「事実の束」と、そこから抽象して来る文学者の創造の営為の問題、つまり、紙面定着を計り得たものと、そうでなかったもの——その両方を見定めることで個々の文学者が作品世界において、何を呼び起してきたのかを訪ねてみたいと思うのである。

## 上 海

一九二一年七月、中国共産党は第一回全国代表大会を開いて、ここに創立を明らかにした。翌年の七月、第二回全国代表大会が前回同様、上海で開催され、コミンテルン加入が決議された。正に反帝・反封建の気運は、淀みなく進行しつつあった。一九二三年、二月、京漢鉄道の労働者達が、総工会を組織する自由を勝ち取る為に闘争を開始した。これは二・七運動と呼ばれ、後年、村山知義の「暴力団記」(一九二九年、上演)に描かれることになる。運動そのものは、約四〇人の労働者が殺され、約三〇〇人が負傷、そして、約四〇人が投獄されるという凄惨なものであった。それゆえ、反帝・反封建の動向は、一時的な退潮期に追いこまれることになるが、一九二三年六月、国民党と共産党の合作が明らかになると、益々、運動形態は尖鋭化して来る。そのような周囲の状況によって自然着火したのが、一九二五年の五・三〇事件であった。早くも同年の二月には、内外綿工場で七万人に及ぶストライキが打たれ、四月には青島にも及んだ。

内外綿は、上海在華紡の中でも第一級の規模を誇っており、この時点で第十五工場までを擁していた。待遇状況を示せば、「上海の日本資本の内外綿紡績工場では、労働時間が非常にながく、昼夜交替作業で、それぞれ一二時間はたらかされたうえ、夜間労働にも夜勤手当がつかなかったし、また賃金も非常にひくく、普通一日二百銭であった。」(胡華『中国新民主主義革命史』)とある。四月末、内外綿の第五工場で日本人職員が十二歳の少女工員を殴打、負傷さ

せ、五月十五日には共産党の指導者の一人である顧正紅が射殺されるという状況で、紛糾を極めつつあったのである。

五月三〇日、上海各大学の学生は共同租界(英・米)において、ピラをまき顧正紅の虐殺、既に逮捕された学生の不当処置を訴えた。工部局(警察機構を含む共同租界の行政機関)の警官は再び学生らを逮捕し、ここに一触即発の状態によって、街頭そのものが騒擾の渦となろうとしていた。「南京路の老聞警察一カ所だけで、拘禁された学生が数百人に達した。三時間ばかりで、一万近くの群衆が警察の入口にあつまって、逮捕された学生の釈放を要求し、『打倒帝国主義』等のスローガンを声たかくさげんだ。ちょうどにらみあっていたとき、イギリス帝国主義は、ついに発砲を命じ、手に一物もたぬ群衆を射殺した。」(前掲書)という事態が生じたのである。この暴動の形を独特の仕方で開示してみせたのが横光利一の『上海』であるが、まず、事件の経過だけは簡略ながら述べておきたい。

五月三十一日 上海総工会(労働組合総連合会)成立

六月 一日 罷市罷業(二〇数万の労働者、五万余の学生、大部分の商人)

四日 会審衙門(中国人の為の裁判所)、逮捕者を放免。

六日 列国、共同租界に戒厳令

七日 工商学連合会成立

一日 一七カ条の要求(「治外法権を廃せよ」等)

二六日 総商会(大ブルジョアジの組織)スト解除――

―(同盟罷業のおわり)―

九月一八日 上海総工会封鎖。

このようにして五・三〇事件は終息するのであるが、この運動の持つ反帝・反封建・反軍閥の理念は、青島、香港、広東の各地に飛び火し、国民革命の推進力となったのである。このようにして、中国現代史の視点から言えば酸鼻をきわめてゆく起点として上海は位置しているが、それとは逆に世界の相場が反映する取引所として、また、紅燈の巷が錯綜する不夜城として国籍不明の都市を形成していた。それは租界という専管居留地の成せるわざであった。また、日本は上海には専管租界を持たなかったものの北四川路近辺に進出し、俗称、「日本租界」として、この地を蚕食しつつあった。一九二三年、日本郵船によって、長崎、上海間を一昼夜で結ぶ定期航路が引かれて以来、益々、手軽に行くことのできる擬似外国、または出稼ぎ先としての持ち味を、上海は發揮したのである。

丁度、この頃、来滬したのは、村松梢風であった。その後、梢風は何度も上海に足を運んでいるが、五・三〇事件の年、事件当日の頃には日本へ戻っていたものの罷市の状態にある上海に戻って来、その印象を記している。片側は共同租界で、もう片側は仏租界である愛多亜路<sup>アドワルド</sup>を歩きながら、一方は罷市罷業のため静まりかえっている共同租界、もう一方は普段どおりの賑わいをみせている仏租界の様子から、不気味なものを感じとっており、「一ヶ月にわたって罷市を断行したと云うような事件は、世界の歴史が始まって以来今回が初めての出来事だ。」(『上海』一九二七)と洩らしている。しか

し、梢風が『上海』へ投入したものとえば、別れた女性との再会や自分が関わった詐欺事件という日常身辺範囲でしかなかった。また、紀行文である「不思議な都『上海』」(一九二三)においても幾つかの問題意識を持ちつつも抑制した書きぶりを示している。

これは梢風の視点が旅行者のそれにとどまり、ホークスボットの言うハ上海人<sup>ハインリッヒ</sup> (『上海史』)の視点を獲得していないからであった。その点で梢風は横光とは明らかに、かけ離れていた。

ともかく、管見によれば、梢風のみが、この事件を直接、眼にする可能性の裡にありながら、それを逸しており、勿論、他の文学者からの報告もないとするのが実情なのである。

今ここで他に眼を転じてみると、五・三〇事件の一九二五年、一月、震災後の捕縛によって壊滅状態に追いこまれていた日本共産党は、上海一月テーゼを発して党再建の方針書を作成している。その中心メンバーの一人である佐野学は奇しくも、この四年後に上海で逮捕されるのだが、ともあれ、五月に再び開かれた上海会議での労働運動の方針書は、五月テーゼとして採択された。当時、上海には、コミンテルンの極東支部があり、また、モスクワの本部へ向う為の交通上の中継地点として、活動家達が往来していた。こうした上海の様相は、宮崎滔天が渡航した頃(一八九一)、北一輝が『国家改造案原理大綱』に上海にあって着手していた頃(一九一九)と比べても、その本質において変らない。つまり、上海は、列強の侵略の印であると同時に、中国をはじめとして各国の活動家達を保護する遮蔽幕であり、本国を離れた革命派達の策源地であった。

日本では、五月二四日、日本労働組合評議会が結成され、この組

織の中から、五・三〇事件の時、「二名の代表が上海に潜行し、中国の総工会と共同して闘争に従事した」（『中国資料月報』第一〇六号 無署名）とあり、またこの評議会から六月二一日に「全支那大罷工大罷市に対する声明書」が出されている。先ほどの文に続けて「このときに学んだ戦略戦術は、翌年、浜松楽器の争議にただちに応用された」（前掲書）とある。今、浜松楽器争議の資料を見てみると、鍋山、三田村ら総勢一五〇名が前記評議会から送りこまれていくことが解り、そのうちの誰かが、五・三〇事件の折、潜行したとも考えられるが、それは問題としない。いずれにしても左翼陣営にとって、上海が支那の同朋達の土地として近い存在であったように、プロレタリア文学者にとっても同様の機能を有していた。中でも青野季吉は先程の上海テーゼに参加した一人であった。

小牧近江は里村欣三とともに、一九二七年四月、『文芸戦線』特派員として、この地を踏んでいる。そして漢口における汎太平洋反帝会議に出席しようとするも果さず、上海にて日中作家の共同声明を発表し、帰国している。

この時の通信は、「青天白日の国へ」（『文芸戦線』一九二七・六）と題して里村と共同して発表しているのだが、その中に、「上海の地をこれで四度も踏むのではあるが……」と記されており、また、別のところでは、「上海に着くと、またもや、顔見知りの特高が岸壁に立っています。」（『ある現代史』）とあって、この頃、往来が頻繁であったことが解る。そして、この時、同行した里村欣三は、後に、一九二七年三月の上海第三回めの蜂起を「動乱」（『文芸戦線』一九二八・四）に描きこむことになるのである。こうした人々の活

動家に近い視点と谷崎潤一郎（一九二六年一月、来滬）に代表される賓客の視点（『上海見聞録』『上海交遊記』）を脱して、いわば、<sup>ハンバインダー</sup>ハ上海人<sup>ハ</sup>、に近い視点によって仮構を果そうとしたのが、横光利一なのであった。

## 『上 海』

横光利一が上海に渡航したのは、一九二八年四月であった。彼は中学時代の級友である今鷹瓊太郎の元に、一ヵ月ばかり滞在しているが、前年の一月には漢口と九江の英租界が占領されるという事態が生じ、四月には蒋介石が四・一二反革命クーデターを強行して南京政府を樹立するというように、いよいよこの国は混乱の度合を高めていた。しかしながら、前年の上海臨時政府樹立の折、蒋介石が、これを破砕し、虐殺行為に出た顛末から、租界は特に圧迫されることなく従来どおりの繁栄を謳歌していたのである。したがって横光が訪れた頃の上海は、これまでと変りのない表裏一体の構造、つまり、黄金境にして喰いつめ者の溜場、没落貴族の逃亡地にして革命派の策源地、加うるに、都会の洗練と悪の巢窟が同居——というような奇体な様相を呈していた。当時、上海には二十五カ国の人々が集っているとされているが、それらの人々が各々の国と自己の運命を背負いつつ、雑居していたのである。

横光が着眼したことは、この奇体な都市における人間の営みを、包括的な視点から捉えることであった。比喩的に言えば、高台から見晴かすような視点によって全体を見ることであった。その意味では、前田愛氏のハ植民地都市<sup>ハ</sup>／＼革命都市<sup>ハ</sup>／＼スラム都市<sup>ハ</sup>の三極

構造の指摘(『SHANGHAI 1925』)は正しい。これらは上海という都市じたいが放っている光量であり、この都市が、人々を招く誘蛾燈の如きものであったからである。しかし、肝腎なことと言えば、この三つのものを貫流している政治の潮流であって、単に五・三〇事件にかぎらず、その外延にある幾つかの問題を内包しつつ『上海』が進展してゆくことなのである。

ロシア革命の余波によって世界へ散った旧体制の人々の裡、上海へ流入した者は、当時では、八千人に及ぶと言われているが、この小説に登場するオルガも、その一員であり、肅清されなかった父のことを語って(四二)余すところがない。そして、思い起されるのはアジア主義者の建築士である山口、国民会議派に属するインド人のアムリ、国粋主義者である甲谷の兄、高重、そして、山口の回想(一六)の中と手紙のみによって登場する李英朴(四三)といった政治の系譜である。今、山口にあてた李の手紙を引いてみよう。

山口君、本日の市街の惨案は、そもそもこれは誰人の発案にかかるものであろうか。世界は常に公論ある人類の、永久的生存権を有するに非ざれば、必ず毀滅の時日あるであろう。凡そ今回の事件は、中、英、国際の紛争に非ずして、実は黄白消長の關鍵であり、之を換言すれば、即ち、亞洲黄色人種が、白種に滅亡せらるるの先導に非ずして他にはない。(中略)、猶、未だ白人の雄心死せざるなり。日と中とは同種同文、唇齒相依る。例えば中国一たび亡びんか、日本も必ず幸いなし。何ぞそれ能く国家の旗を高く樹てるを任せんや。(四三)

これは五・三〇事件が排日から排英へと展開してゆく過程において、その矛先を英国のみに向けた危うげな趨であろう。加えて言えば山口、アムリ、李といった人々が、アジア主義という共通の括弧でくくられる時、その危険性は、いっそう大になる。アジア主義は、『上海』の用語で言えば「アジアを連結させて白禍に備える」(一五)主義であった。しかし、先ほどの李の手紙が奇しくも示すように日本を盟主とした支那保全主義が後に皇道精神と一致する危うさを感じないわけにはいかない。「日本の軍国主義こそ、東洋の白禍を救い上げている唯一の武器ではないか。」(一五)という山口の言説は、その点で救いようのないものである。また、「——先づ、何者よりも東洋の支配者を！」(一九)と思う参木についても。

しかし横光の包括的な視点は、そのみにとどまらず、如上の思想とは対極にあるもの——共産党員である芳秀蘭を造型することで『上海』に強度の緊張関係を生み出している。この女性が誇らかに「もしあなたがほんとうにお国をお愛しなすっていらっしゃいますなら、中国のプロレタリアもお愛しなすに違いないと思います。」(二四)と述べる時において、何よりも主人公、参木を無化するマルクシズムの代弁者である、と見なければならぬ。その出所は案外、身近かな処にある。

金子光晴は一九二七年、二度目の上海行を果して帰国していた。そして、「上海を題材にした百枚ばかりの小説『芳蘭』を書いて、『改造』の第一回の懸賞小説に応募した。自信がないので、佐藤春夫と、横光利一に見せると、おそらく、これ以上の作品はあるまいと太鼓判をおしてくれたが、ふたをあけると、私の小説は、次点に

なっていた。(中略)この空中ブランコの曲芸がみごと失敗したので私は、小説も放擲した。」「『どくろ杯』

今、懸賞小説の結果が発表された『改造』一九二八・四月号を開いてみると、一等が龍膽寺雄の「放浪時代」、二等が保高德蔵の「泥潭」である。金子のものは数名に交って確かに佳作となっている。私が問題にしたいのは、横光が金子のものを読んでいた事実と、金子の小説の内容である。『芳蘭』は「上海の労働問題を扱い、女工とも娼婦ともつかない女のことを百枚ほど書いた。」(中央公論社「金子光晴全集」第十五卷所収の年譜)ものであった。芳蘭と芳秋蘭の名称の類似性については、春名徹氏が指摘(「上海・一九二八年」)されていたが、更に進めて言えば、「女工」で「娼婦」である存在から「女工」で「共産黨員」である存在への転化こそが、横光にとっての独創であったわけであり、この共産黨員を自己の分身と言わなければならないのは、作家的冒険であると同時に、自己内部に胚胎するアジア主義、マルクシズムといった二系統のアポリアというものを考究する場として、この小説を考えていたからであった。

有様から言えば「中国がいま外国資本を排斥することから生じる得は、中国の文化がそれだけ各国から遅れていくことだけにあるんじゃないか」(二四)という参木の問いに対し、秋蘭は、「そんな問題は、列国ブルジョアジーの掃溜である共同租界の人々からは、考えて頂かない方が結構」(同前)と切りかえし、それに続けて、「あたしたち中国人にとって、殺到して来る各国の武力から逃れるための方法としてでも、あたくしたち以外の考え」(同前)というもの

は無いのだという卓見を示している。ここには明敏に民族自決の思いが現れている。ただ、芳秋蘭に対する造型は、幾許かの欠点を有する。これが辛亥革命時の秋瑾や廖仲愷夫人の何香凝、孫文夫人の宋慶齡を思わせる婦人闘士でありながら、当時、名花と呼ばれた役者、梅蘭芳のような艶やかな存在として描かれていることである。

つまり、横光が中国民衆を暴動シーンのマッスとして描いたように、また、お杉を襲う「襤褸の群れ」(一五)、参木を河に突き落す「人の塊り」(四四)として定着したように、芳秀蘭は革命闘士としては表層的と言えないこともない。『上海』の瑕瑾の一つである。

ともあれ、横光が極東のヴェニスと言われた浮かれた都市、上海を媒介にして描き出そうとしたものの一つは、この不可解な都市に底流する政治の潮流であり、それを関与させたことが、単なる個人的な人物達の操作に終らず、『上海』を厚みのあるものになっている。

つまりは、『上海』という小説には政治小説としての要素も色濃くある、ということなのだ。参木が「――あのロシア人達(注：男は乞食、女は娼婦)に、われわれは同情する必要は少しもない。」(一九)と言いながらも、「先ず何事も、印度が独立したその後だ。」

(一九)と協調性を見せるのも、ひとえにこの政治の潮流によって惑乱され、定見を持つことを許されぬほどの行動の界域を行くからであった。綿糸会社のラッダイトの場に居合せ、または騒擾の街頭において、二度まで芳秋蘭を救う参木は、このマルクシズムの界域に踏みこむことにより、「東洋主義者」(二四)としての自己が大きく揺さぶられることになる。そも参木とは一体、何者か。

そのことは、この男が発端から持っていた資質に思い至せば明瞭

になろうというものだ。

すなわち、参木は帰属する場所を持たぬ浮き藻の如き者であった。「もう十年日本へ帰ったことがな」(一一)く、甲谷の妹、競子(未登場)に対する失恋の痛手から立ちなおれない。死に親しみつつ、それとは別に望郷の念に身を焼かれている。第一章が故郷の母への思いで初まり、終章も同様にして、この思いが滑りこんで来ることは、この望郷の念に裏打ちされていたからであった。そしてこの思いこそ、上海租界に長く住んだ者のものであった。だがこれは、上海に調和した通人——<sup>上海人</sup>上海人、例えば、彼の地に二十年以上も住み、詩人であり酒徒であった島津四十起(田中貢太郎「上海瞥見記」)などとは別の感性である。参木には、この地にある焦燥と、居心地の悪さがあったのではなかったか。杳として解らない自己を抱えて……。まして、中共の芳秋蘭と関わりを持つ参木には、どうあってもその資格は無い。

もとより参木は、自分の「肉体の占めている空間は、絶えず日本の領土となって流れている」(九)という認識の持主であり、その内面は故国に繋がれている。この参木の感懐は異国にあって、誰しもが少なからず思うところのものであるが、彼の場合、過度なまでに敏感である。国を憂い、国人である自己について思い悩むこの男は、果して国家膨張主義の全き是認者か。——否、彼は揺れに揺れ動く振幅の裡にあって、未だ何者でもありはしない。むしろ、真率にして滑稽な存在であると言えよう。いずれの局面においても、自己を嘆ずる存在である参木は、正にドン・キホーテそのものであった。

ドン・キホーテなる呼称は作中にも散見しているが、それは次の四カ所である。

「あ奴はああ云うドン・キホーテで面白くない」(四)、「あの不可解なドン・キホーテ」(一一)、「女の群れを跳ねのけて進んでいくドン・キホーテ」(一二)、「顔を顰めて、首を切られて、今頃からドン・キホーテの真似をして」(一七)。これらの言葉は(一二)をのぞいて甲谷の口から発せられ、『上海』の前半に集中しているのだが、心は常に満たされることなく、身の不遇を意識している参木の姿を、うまく言い当てている。理想と現実との狭間にあって呻吟し厳粛にして、かつ、滑稽な姿を。これは人生に対して心得顔の甲谷などとは、明らかに違った心性の持主である。そして発端から持っていた参木のドン・キホーテぶりは、政治、経済および暗部といった局面に多々関わることによって、益々、その度を高めていくのである。そしてそのどれもに関わりつつ遂に何者にもなり得ない参木の良い加減さは、早晚、断罪されずにはいられないものであった。

彼は周囲を見廻すと、排泄物の描いた柔軟なうす黄色い平面が首まで自分の身体を浸していた。彼は起き上ろうとした。しかし、さて起きて何をするのかと彼は考えた。生きて来た過去の重い空気の帯が、黒い斑点をばっばつ浮き上がらせて通りすぎた。彼はそのまま排泄物の上へ仰向きに倒れて眼を閉じると、頭が再び自由に動き出すのを感じ始めた。彼は自分の頭がどこまで動くのか、その動く後から追っ駈けた。すると、彼は



自分の身体が、まるで自分の比重を計るかのようにすっぱりと排泄物の中に倒れているのに気がついて、にやりにやりと笑い出した。――

(四四)

参木の越し方は、寄せ来るマルクシズムの波に対する不安と、故国の存立に対する愛国的情熱によって、もたされている。これは横光自身の懸念したことの重なり合う筈である。双方の対立による解決は与えられていないが、『上海』は多くの挑発的な言辞を発散するところで成立しているものであり、自らがマルクシズムとの苦闘を演じることで行なわれた演目であった。参木がドン・キホーテであることは、まずもって、ここに尽きると言って良い。

比喩的に言えばドン・キホーテが、リアリストにして辛辣なサンチョを従者に持っているように、また、ドン・ジュアンが同様に、スガナレルを従えているように、参木を撃肘する存在として、マルクシズムを考えないわけには、いかない。その代弁者である芳秋蘭に幾分の甘ったるさがあるとしても、どうあっても甘味材料とは、なり得ない問題が歴然とある。それは、五・三〇事件自体の持つマルクシズムの波動であり、賞むべきは、それを描く作家の意欲だ。

『上海』には、一九二五年六月初旬頃までの事件の概要が描かれている。事件展開は、紡績工場の罷業――工部局前の暴動――罷市――戒厳令という系統によっており、ほぼ事実合致したものとなっている。この闘争は、政治闘争であるだけでなく経済闘争といった局面を持っており、二十数万に及ぶ八工・商・学Ⅴの人々によつ

て戦われたものであった。横光の書法では、八工・商・学Ⅴの各方面について、委曲をつくしたものは言い難いが、暴動というものの威力を、あらぬ限りの力でもって写し取っているといえよう。この暴動シーンは『上海』の白眉と言っても良いと思うが、横光は幾つかの小ぜりあいや、細かな動きをも取りこみながら、混乱と沸騰にわく海港の様子を包括的に描き出して、定点観測といったものでない革命の原型を提出している。

ともあれ、五・三〇事件に巻きこまれた人々の行く末は、参木をはじめとして惨憺たるものであった。虹を掴む勢いでありながら「も早や動くことが群衆に見つかると同様」(四一)で、追われ行くしかない甲谷、その甲谷に「俺がやられたら後を頼むよ。」(四三)と言い置いて出かけなければならぬ山口、また、スパイの濡れ衣をきせられて「仲間から銃殺されたとか、されかけたとか」(同前)噂される芳秋蘭というように。

これらの者の如く横光は、租界を席捲した一つの事件を介して、そこに低迷し、暗礁に乗りあげた人々を八上海人Ⅴの視点から描破し、この租界生活者が住まう場所じたいの矛盾によって、はじきかえされ逸脱してゆくしかない様子を現前させてゆく。そこでは一人一人が行動の人であるのだが、悪しき運命の表現者でもあった。全ての媒介項であった参木は、根難な道程ゆえに、お杉(娼婦)の内懷ろで憩らぐことになる。

広 東

広東は古くから中国南方の門戸として栄え、南京条約(一八四二)

以前から各国商人達が往来していた土地であった。租界が設定されたのは、英、仏ともに一八六一年のことであり、上海について設定時期が、早い方の部類に属する。一九二三年三月には、孫文が第三次広東政府を成立させ、同年十月、コミンテルン代表、ボロディンが乗りこんで来、「連ソ・連共・扶助工農」の姿勢を打ち出して来る。翌、一九二四年一月、国民党一全大会を開いて第一次国共合作を画策。また、六月には、黄埔軍官学校を設立して武力革命への道を歩みはじめる。正に広東こそは、一九一九年に孫文が中華民国を成立して以来というものの鳴動し続ける革命派のダイナモであった。

五・三〇事件の年、一九二五年の五月一日には、一〇万人にのぼる大示威運動が行なわれ、五・三〇そのものの余波としては、広州・香港ストが顕在化して来る。省港ストは、六月一九日、広東政府の支援の下に、上海の工商学連合会の一七カ条の支持を掲げ、二五万の労働者が参加して行なわれ、六月二九日の時点で、一三万人の労働者が、香港から広州へ引き揚げ、香港を完全に経済封鎖した。

これより少し前に起ったのが世に沙基虐殺事件と呼ばれているものであり、前田河の『支那』の舞台となったものだった。この事件は、五・三〇事件の一ヶ月に満たぬ間に起ったものであり、その影響を色濃く受けたものである。

この事件は広東の租界である沙面近辺で起きた。沙面は英・仏の爪牙によって生じた人工島であり、一八六一年、埋立てが完成し開港されたものであった。事件の概要を示そう。

一九二五年六月二三日、広東の七万に及ぶ労働者、学生、市民、軍人が上海の虐殺事件に抗議するデモを組織して、沙面租界対岸の

沙基にさしかかった時、英国兵が発砲、英・仏の砲艦が砲撃を加え、死者五二人、負傷者一七〇名余が犠牲となった。広東政府は英国に対して経済断交を宣言するとともに、ストライキ労働者を擁護していった。この動きは、香港の大ストライキとなって流入してゆき、翌一九二六年七月、北伐戦争が開始されるまで、状況は続行された。

前田河の『支那』は、一九二五年六月中頃から八月後半までを範囲としており、荒削りな書きぶりながら、事件の概要を浮かびらせている。

ともあれ、五・三〇事件と連続する沙基虐殺事件というものに、前田河は、どのような仮構を果し、そこに横光とは違った、どのような得失があるのか、を訴追してゆくことを前提としたい。

この頃、留学生であった草野心平の『動乱』という自伝小説も存在するが、未見であるがゆえに、ここではふれないことにする。

## 『支 那』

前田河広一郎は、横光に遅れること数ヶ月、一九二八年十月には大陸の土を踏み、翌年三月まで中国各地を訪れた。「私は、東京の一切を振り捨てるようにして、支那の旅へむかった。それは、一つには、私の思想上の自己矛盾に対する闘争の方法でもあった。急に動いて見たかった。尠くとも、もっと大きく動いている物に接したかった。」これは、前田河のルポルタージュである『大きく動く支那』（一九二九・四 改造社『悪漢と風景』所収）の書き出し部分である。ここには疲労の色濃い一人のプロレタリア作家の姿がある

と思われる。

これより数年前、日共は、山川イズムと福本イズムの二つに分断されていた。それによって新たなるインテリゲンチヤ層が流入して来たのだが、前田河の依拠する『文芸戦線』に後者の福本イズムの波が押し寄せていた。前田河が渡航する前には、二度の脱退者を出していたし、何よりも前田河が渡航するのは、三・一五、四・一六の大検挙があった頃であって、プロレタリア文学においては、四分五裂しながら、日共においては非合法的に前進することになるのである。

ところで、そうした暗い背景を胸に秘めて、やって来た前田河は、横光がそうだったように金子光晴と交遊を結んでおり、五・三〇事件という、この民衆暴動の形態について、浅からぬ関心を抱いている。勿論、この前年には文戦派の同志、小牧近江、里村欣三が来滬しており、断続的なこの運動の余波については、聞かされていたに違いない。

「(前田河は)『内外綿の工場内をみたいが、いい連絡はないか』と、私にたずねた。石丸りか(注：金子の寄寓先)の弟が、幸い、工場の女工監督をしているのでたのみこみ、内外綿の寮を、前田河といっしょに訪ねることにした。(中略)ふたりは、薄日のあたっている比較的暖い日に、内外綿を訪ね、綿くりの作業をみたり、寮の浴場に入れてもらったりしてかえってきた。」(金子光晴『どくろ杯』)

また、別のところでは「私は、上海総工会の華々しかった活動の歴史を辿った。」(『上海の宿』)とあり、前田河の並々ならぬ関心ぶ

りを示している。こうしたことは前田河の文学理論上から言っても当然と言えば当然の関心事であったと言える。しかし、横光が改造社の山本実彦宛にあてた書簡に、「(『上海』は)ちくちくかかって長篇にしたい」(一九二八・六・一五 消印(推定))という意向を持っていたことは、「東京の改造社に長距離電話をかけて、持金をはやく使い果し、稿料の前借を、電報為替で送ってもらったりして」(『どくろ杯』)いた前田河が知らぬわけもなく、『支那』と『上海』の人物像の類似性などから、浅からぬ因縁を感じさせる。また、『支那』の掲載時期(『中央公論』一九二九、三〇五、七〇九)は、『上海』の掲載の第二回めから第四回めと重なることから、前田河が敵愾心を燃やしていたことは想像に難くない。これまでも、前田河の『文芸戦線』(一九二四・六月発刊)横光の『文芸時代』(同十月発刊)が対抗していたことから多言は要すまい。

そうならば尚のこと、前田河の反『上海』の姿勢と、彼が彼であるところの由縁を探らねばならない。すなわち、前田河の『支那』に独創性というものがあるならば、それは一体、何かという問題である。

『支那』は、沙面の英国副領事付きのコックである李刀達が沙基虐殺事件を通じて青年革命家に成長するという筋立てであった。方法としてはボロディン、廖仲愷、汪精衛といった実在の国民党指導者を登場させ、中途に香港大ストライキを置き、廖仲愷の暗殺をもって終盤を迎える、というやり方である。それに、租界の暗黒を代表する人物——表では人髪販売所を管理、裏では誘拐会社を維持する馬白堯、その頭目であり帝国主義と結託した王資平、その第三夫

人で「淫婦」(21)と思われた燕飛芳(実は革命に挺身する女闘士)を配し、これら全てを主人公である李に関与させながら作品の幅を広げようと計っている。

被抑圧民族における同朋達の姿を描くことは、当時のプロレタリア文学者の一方向であり、中国を舞台にしたものに限っても、黒島伝治「武装せる市街」、平林たい子「敷設列車」等の豊富な形象化を齎している。しかし前田河の場合、「今、日本の無産階級は正に、その全力を盡して支那の無産階級を援けなければならぬ!」(『文芸戦線』一九二七・六「日本の無産階級文芸界同志に訴う」というような郁達夫の呼びかけが、果して彼の心底に届いていたか。『支那』は日本人不在の小説であるが、前田河自身の問題——革命の前途への信頼、反動の断罪、ブルジョワジーへの憎悪といった問題を内に含みつつ、この身近かな隣国に眼を向けたものであるには違いない。先に同志、青野季吉は、「自然生長と目的意識再論」(『文芸戦線』一九二七・一)を発表して、プロレタリア文学者を具体的な社会主義意識にまで引き上げることが再認していたが、前田河のこの作品も、そうした具体的な相の下に考えるのが妥当だと思われる。前田河が大陸に足を踏み入れた時は、既に蒋介石が四・一二の反動ゆえに革命の流れを頓座させ、一九二八年六月に北伐を完了して、覇権を握った後であって、革命の幻滅を感じさせる状況にあった。そして、革命というものの真の状況が全く複雑怪奇な姿を呈し現前していることに、前田河自身、気づいていた筈である。

『支那』に登場する国民党幹部の裡、暗殺された廖仲愷は別として、一九二七年の時点で何らかの形で転身しつつあった。汪精衛は

蒋介石と手を握り、ボロディンは顧問解約となっていた。勿論、前田河に、この複雑な全貌が、はっきりと見えていたわけではあるまい。彼にあるのは、この広東を震撼させた沙基虐殺事件を介して、それに打ち続く革命運動の流れを賞揚し、反動を断罪し、租界に代表される列強の悪を撃つことにあった。ともあれ、内容を見ておこう。

今や五・三〇惨案を不平とする民衆は、沙面を罷工し、抗議デモを行ないつつあった。一団が沙面对岸の沙基に近づいた時、その口火を切ったのは李刀達に他ならなかった。ここでは李が三本の花火によって市街戦の戦端を開いたことになっており、前田河の創作であるのだが、李という闘士に仮託した一面が良く出ていと言えよう。こうして引き起された暴動は、銃声と砲撃によって阿鼻叫喚の様を顕現する。その一場面は、こうである。

頭の上で、いままで、

『やつつける!——外国人を敵き出せッ!』

と大声でわめき散らしていた、学生らしい青年が、水を嚙むような音を立てたと思うと、李刀達の上へ憎いほど乱暴にのしかかって来るのである。押しのけて見ると、その青年の下頤が全部失くなっていた。どこかで、白い布に、颯と赤い色が流れる。色は、とめどなく漏出するインキのように布地を染めて行った。それを見ている間、彼れの耳には鮮やかに陶器がびんと裂けるのが聞え、更らに、その下から、食用蛙が踏みつけられるときのような気味悪い人間の呻吟もして来た。すこし横

手の支那靴の底と大きい臀部の下から、仔豚の屠殺されるときのようなきい声、さいぜんからつづいてゐる。子供にちがいない。

(9)

この暴動シーンは、一見してグロテスクな位リアルに見える。だが果してそうであろうか。「食用蛙が踏みつけられる」「仔豚の屠殺される」というような誇張法によって、実は暴動の場を必要なまでに飾り立て、かえって信憑性の薄いものにしてはいまいか。今ここで横光の暴動シーンと比較することはしないが、横光のそれが感覚的なイメージの連弾によって加速度を増す時においても、敵側の動きを含めた群衆の動きは克明であるばかりでなく多角的である。

ところが前田河の方は、暴動シーンに限らず『三等船客』を数等倍したような大仰な口調に満ちており、時にアジ演説口調や政策論的公式主義によって、むしろ小説の効果を減殺している。

そして問題だと思われるのは、もう少し根本的なことについてである。小説は後半、香港に場所をうつし、大ストライキのただ中へと入っていくのであるが、この大ストライキの描かれ方は借景の域を出ないものである。というのは、これが富豪、王資平を誘拐し、それを擬装した葬列へと視点は動いてゆくこと、それをまた、空から妖しいばかりの美女である燕飛芳が飛行機で追いかけるというような安手のスペクタクルの方向へ結びつけてしまうからだ。そして、巻末を廖仲愷の暗殺を発見する李刀達の姿に集約させる時、これが安直な革命烈士の讃歌でしかない愚を犯している。(前田河の描くボロディンが尊大な様子なのに対し、マルローのそれ「征服者」

は何と実務家であることか)

してみれば、私が先述した革命の前衛への信頼(李刀達)、反動の断罪(暗殺者側批判——注)現在に至るも諸説紛紛)、ブルジョワジーへの憎悪(王資平)というものは、全て中途半端で形骸化したものでしかない。つまりは教条主義的なものが先行しており、その実体の伴わないものになっている。ここにおいて判然とするのは、前田河自身のヴ・ナロードである『支那』が、明らかに隘路の裡にあって、尚かつ、観念的な中国像の範囲にしかないことである。

したがって、『現在執筆している『支那』の如き(中略)支那革命運動に関する作物を、私は今後もしどし書いてみたいと思っている。世界は、今後支那を中軸にして、一回転するかもしれないのだ。——」(「四十二歳の現在迄」)と述べているような意気込みほどこに、この小説は成功していない、と言うしかないのである。

全無産階級への連帯意識に動かされて革命下の中国人像を提出することは、前田河が自己の役割としたところであろうが、「私の見に来、触れに來たのは實在の支那の民衆である。」(「楊子江から」)という意味においての民衆は、少くとも『支那』には描かれていないのである。確かに主人公、李刀達は貧農の出であり、悪ずれのした、したたかな中国人ではあったが本質において「神秘と、冒険と、芝居気の好き」(19)存在でしかなかった。拘すべきことと言え、これが叩きあげの労働者であり、根強い階級憎悪を発端から持っていることだろう。だがしかし、この卓抜な設定が荒唐無稽譚の方へ拉致されてゆくにつれ、生理的レヴェルでの階級憎悪のみが浮き上り、公式化された理念が空転するということに帰着して

ゆく。

青野季吉の用語で言えば「自然生長的なプロレタリア芸術家」(「自然成長と目的意識」)の範囲にあった前田河は、そこから脱出しようとして果せず、『三等船客』に遠く及ばない空疎な世界を披瀝してしまったのである。

\*

『上海』と『支那』の二作品は横光・前田河という二人の作家がその地に足を運ぶことによって知り得た動乱の形を筆紙に写そうと試みたものであった。前者が租界内の日本人、後者が租界(を出た)外の中国人の視点に拠っていることは明瞭である。しかし、こうした視点の相違にかぎらず前者が革命の受動者としての消極性を積極性へと転化し得ず、遍歴後の安息に憩うこと、また後者においては、革命の能動者を陳腐な物語の渦中の人としてしまったことにより、不足部分を持つ。また、中国の民衆を描くという点で両者は不完全であり、その意味において相互補完的なものである。

今、横光の作品が脱新感覚派の様相を持ち、横光最初の長篇であること、同時に『支那』が革命地中国を描く前田河の作品群の発端であって、しかも、細田民樹の言うように「プロレタリア文学運動一〇年の歴史において、はじめて連載される長篇」(『中国資料月報』第一〇六号)であることに逢着すれば、作品世界の類似性以上に対峙しあうものが感じられる。つまり、時代と拮抗する新機軸の長篇として。しかし五・三〇事件を媒介にして中国から吹いてくる風は、実は創造の営為そのものを暗くする故国の風と等価であった。つまり、彼等は何故に故国の問題についてでなく隣国の状況を克明

に記さなければならなかったのだろうか。または隣国の問題に借りて故国の問題を訴追しなければならなかったのか。そこにどこか倒錯された情熱を感じないわけにはいかない。——という単純な疑問が胸中にはある。この二人の文学者が対峙し合った頃(一九二八・九)から数年後には、第一次上海事変(一九三二・一月)が起り、『満州国』が建国(同三月)されている。そして最早、その激動期において、立場と書法の違いを持つ二作品が描いた世界も遠景になりつつあった。丁度、上海、広東の二都が革命の舞台を農村部へと明け渡してゆくように。

五・三〇事件を巡る、その後の動向は豊富な文学作品となっている。横光の描いた事件の発端から前田河へと連結されたものは、草野心平「動乱」、マルロー「征服者」に接し、また、里村欣三「動乱」とマルロー「人間の条件」は重なり合おうとする。中国側からは茅盾、「虹」、葉紹鈞「倪煥之」、林疑今「上海の怒号」があった。私は当初、これらの作品群に瞿秋白、施英などのルポルタージュを加えたものを年代順に配列することを考えていたが叶う筈もなく今回のような体裁になった。

——了——

(追記) テクストは福武書店「上海」(流布本)、改造社「支那」に拠っている。必要に応じて現代かなづかいに改めた。

本稿は私の研究テーマである「昭和文学における中国像と租界観」の模索の一つである。

アジア史の春名徹氏、「芳蘭をさがす会」世話人である渡辺育雄君に感謝します。